

伊豆沼・内沼における環境省の外来魚対策について

1. 経緯等

伊豆沼・内沼では、特定外来生物であるオオクチバス等の食害により、平成8（1996）年頃からゼニタナゴ（絶滅危惧ⅠA類）などの在来魚類が大きく減少した。環境省では、地元NPOや有識者、関係行政機関等の協力を得て、平成16（2004）年度からオオクチバス等の防除事業に着手している。

環境省の取組みに加え多くの関係機関や関係者の取組みにより、ブルーギルやオオクチバスは低密度状態となり、ゼニタナゴなどの在来魚類の回復が見られるようになった。

現時点では捕獲の圧力を弱めてしまうと、オオクチバスの個体数が再び増加する懸念があることから、更なる低密度状態を目指している。具体的には、繁殖が困難な密度まで減少させた状態である遅滞相管理を目標として捕獲等の対策を行っている。

2. 取組状況

（1）人工産卵床、三角網、定置網、刺網、電気ショッカーによる防除を実施しており、令和5（2023）年の結果は以下の通り。令和5（2023）年は産卵床での駆除数が多く、成魚の増加が懸念された。この状況が次年度以降も継続するかどうか、注視していく。

	表1.人工産卵床、三角網による捕獲結果			
	オオクチバス		ブルーギル	
	卵	稚魚	卵	稚魚
人工産卵床	52		0	
三角網		61,946		0
合計	52	61,946	0	0

		表2.定置網、刺網、電気ショッカーでの捕獲数			
		オオクチバス		ブルーギル	
		成魚	幼魚	成魚	幼魚
定置網	繁殖期	5	20	0	0
	非繁殖期	2	98	0	20
刺網	繁殖期	1	0	0	0
	非繁殖期	5	0	0	0
電気ショッカー	繁殖期	59	0	0	0
	非繁殖期	4	93	0	0
合計					

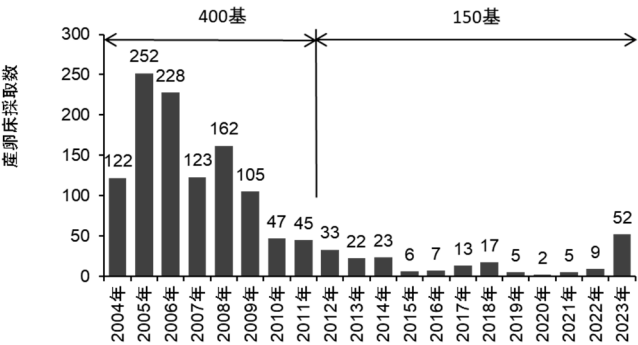


図1. 人工産卵床によるオオクチバス産卵床駆除数。

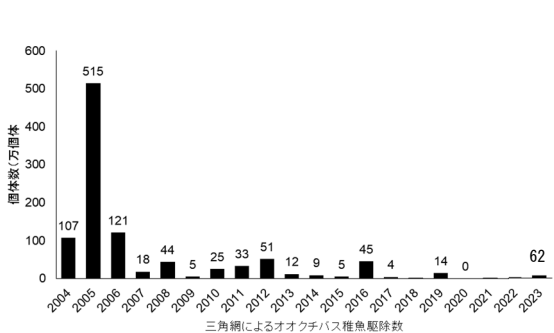


図2. 三角網によるオオクチバス稚魚駆除数。

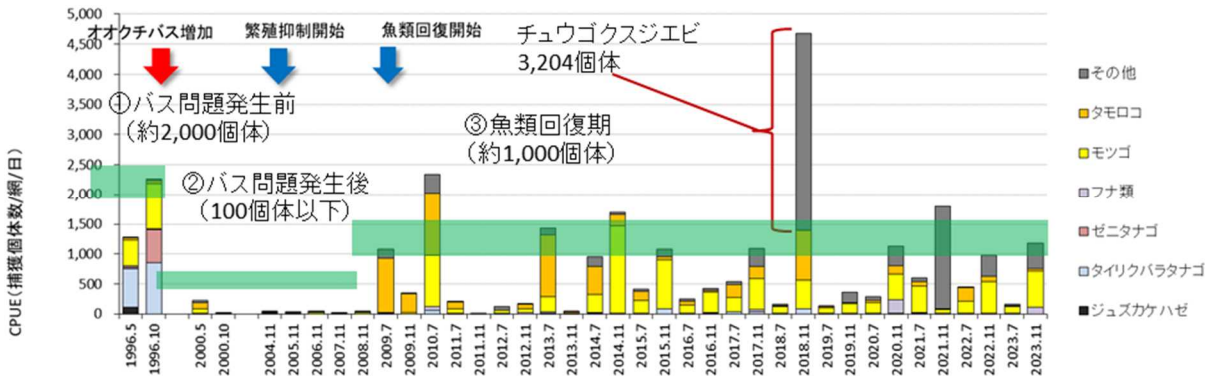


図3. 伊豆沼・内沼における定置網1枚あたりの魚類捕獲数の経年変化。

(2) 環境 DNA は魚類の生息状況を評価する新技術として期待されている技術であり、当該沼の外来魚のモニタリングに活用していく目的で測定した。今年度のオオクチバスの環境 DNA 濃度は 203.3 copies/L で、根絶にほぼ成功した金原ダムの値と比較するとまだ高い値であった。一方、ブルーギルについては、まったく検出されず、遅滞相管理の状況に入ったものと考えられた。

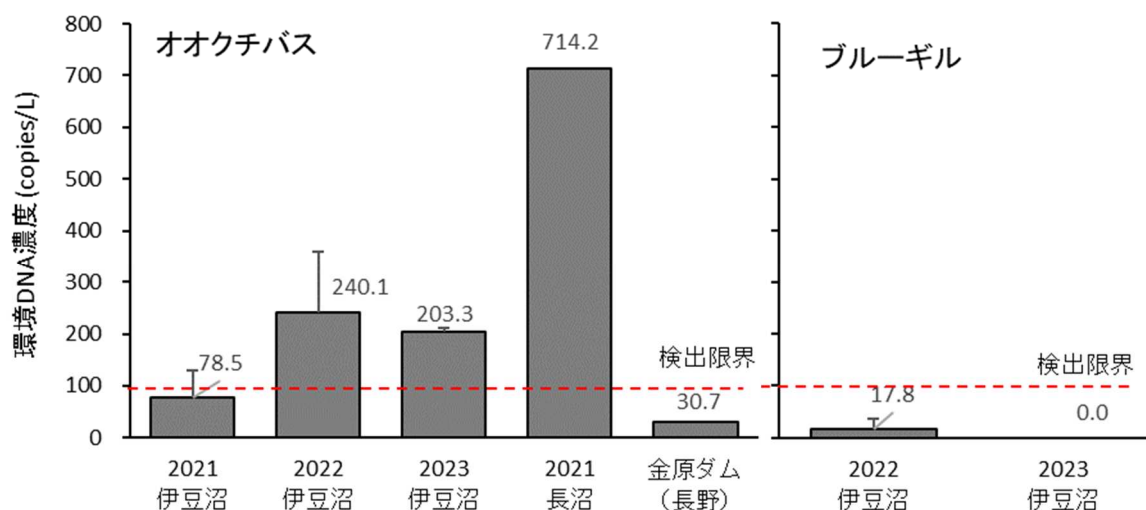


図 4. 伊豆沼・内沼および他水域におけるオオクチバス・ブルーギルの環境 DNA 濃度の経年変化.

(3) 密放流対策事業として、令和 4（2022）年より伊豆沼・内沼に監視カメラ及び注意喚起看板を設置している。監視カメラは、伊豆沼・内沼の中で車が止めやすく、一番密放流される可能性が高いと考えられる場所に設置している。毎月、監視カメラの映像を確認しているが、現時点まで、密放流と思われる事象は確認されていない。また、令和 5（2023）年は、住民や小学生を対象とした普及広報資料としてマグネット式ステッカー、クリアファイルの配布を実施した。

